ゆき@鹿児島、ITを道具に医療革命進行中です(*^ ^*)

大熊 由紀子

第73回

ある日東京に生まれ、01年までの17年間、朝日新聞の福祉、医療、科学、技術分野の社説を担当。著書に『寝たきり老人のいる国いない国』『福祉が変わる医療が変わる』（ぶどう社）『患者の声を医療に生かす』（医学書院）など。国際医療福祉大学大学院教授（医療福祉ジャーナリズム）、千葉県健康福祉政策担当参与。福祉と医療、現場と政策をつなぐ「えにし」ネット志の縁結び係。http://www.yuki-enishi.com/の「優しき挑戦者の部屋」などでバックナンバー読めます。

①スタッフミーティングは、毎日午前８時30分～９時

桜島が爆発的噴火を起こしたこの初春、医療の世界でも、それにおとらぬ「爆発」が鹿児島で起こりました。

クリニックの二医師が大会長をつとめるという前代未聞の学会に、全国から９００人の医師、ナース、歯科医師、歯科衛生士、栄養士、薬剤師、ケアスタッフたちが集まり「多職種連携」をキーワードに熱気が渦巻いたのです。

◆3種の神器と移動オフィスと

熱気の源をつきとめようと、第11回日本在宅医学会の大会長をつとめた中野一司さんと、朝から晩まで過ごしてみました。

朝の8時半、ナカノ在宅医療クリニックと訪問看護ステーション合同のカンファレンスが始まります。医師、ナース、理学療法士、事務職、総勢20人ほどが写真①のようにパソコンを開きます。患者さんごとにつくられている電子カルテで情報を共有しながら、病状の確認や診療方針、今日の訪問計画について、活発に意見が飛び交います。

30分のミーティングが終わると、中野さんはクリニック（写真②）に戻って訪問診療の準備です。医師とナースに運転手さんが加わって3人が1チーム。2チームがそれぞれ10～15軒の自宅を訪ねます。

運転手さんつきというと贅沢のようですが、移動中に、インターネットでデータを事務職に送ったり、携帯で連絡をとったり……ここは「移動オフィス」なのです。

年金暮らしの運転手さんは、「給料もろて、人の役にたてて、こげん、うれしかことはなか」。プロですから抜け道に精通している上、車の中で待機しているので駐車違反でつかまる心配もありません。

◆誕生日の花束と笑顔の写真と

ナースが途中で車を降り、花束をもって戻ってきました。きょう誕生日を迎える患者さんにプレゼントにするために予約していたのだそうです。

写真③は、２０００年3月以来診療していた認知症の女性です。大腸癌が進み昨年1月、82歳のとき腸閉塞を起こし、入院して人工肛門をつける手術をしました。

3月退院と同時に、痛みや辛さを和らげる緩和治療を開始。そして、ひとり暮らしのこの女性を、ケアスタッフとともに支え続けました。5月29日の誕生日には、花束をプレゼント。

左が中野さん、右は鹿児島大学医学部6年の実習生です。

老婦人は、専門医の予想をはるかに超えて穏やかに生き続け、12月29日、自宅でやすらかに息をひきとりました。

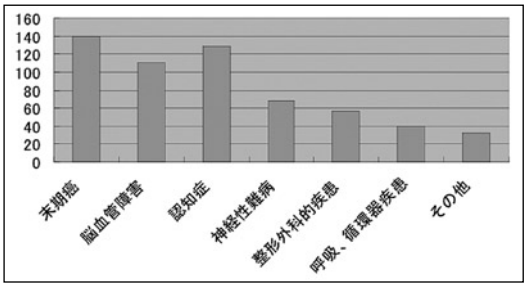
誕生日祝いの花束を受け取った笑顔の写真は、しばしば、遺影として祭壇に飾られることになるのだそうです。

②住宅街に溶けこんだナカノ在宅医療クリニック

クリニックの HP は、http://www13.ocn.ne.jp/~nazic/

④ケアカンファレンスは、ご本人を中心に自宅で

③癌末期で認知症の女性に、誕生日の花束をプレゼント



10 年間にかかわった患者さんは 578 人

思い出のアルバムをめくりながらのお喋りは訪問診療の大事なひとときです。

◆事務職と連携して賢く働く

さて、訪問診療風景に戻ります。

中野さん、床に座って、患者さん、家族と和やかに話し込みます。そのあいだにナースは体温、血圧、脈拍を計って中野さんに伝えます。それをパソコンに打ち込み、クリニックで待機している事務職に電子メールで送信します。他の医療機関への紹介状や処方箋もメール と携帯であっというまにやってのけてしまいます。

訪問診療を終えてクリニックに戻る4時ごろには、電子カルテへの書き込みも書類も事務職が仕上げてくれているので、それを確認して、きょうの仕事は終わり。

いい診療をすると「医師はヘトヘト、経営は赤字」という常識をしっかり破ってしまっています。

中野さんのモットーは、

❶抱え込まない。❷働きすぎない。❸賢く働こう。❹楽(らく)するために、知恵を出そう。

なのです。

◆実践に制度が追いついて……

型破りな中野さんの前身は病院ITのカリスマです。鹿児島大学付属病院の検査部で3つのシステムを立ち上げた後、「病院を出て、在宅医療・介護の現場にITを活用したシステムをつくりあげたい」と夢を抱き、志を同じくするナースと事務長、3人で訪問診療専門のクリニックを立ち上げました。

名人芸ではなく、どこでもだれでもできるシステムをつくるのが夢ですから、地域に大勢の仲間をつくってゆきました。写真④は、患者さんや家族と一緒にさまざまな職種が知恵を出し合うケアカンファレンスの風景です。地域のケアマネジャーや福祉用具の専門家も加わっています。中野さん自身は、この写真を撮影中なので、写真の中にはいないのですが。

私が同行した訪問先のうちの何軒かにはケアマネジャーも待っていて、今後の方針の相談に加わりました。その1人の言葉が印象的でした。

「こん方は種子島出身じゃっで、ヘルパーさんは種子島出身の方を頼もうかと思うちょっとです。鹿児島弁じゃっと、気持っが伝わらんでなー」

お国言葉を大切にする配慮と最先端のIT技術が見事に調和していました。

中野さんたちがこの10年間にかかわった患者さんはグラフのように578人。そのうち149人を自宅で看取りました。そしてこのやり方は「在宅療養支援診療所」として06年には国の制度になりました。

ボランティア精神がつながると社会が変わるという法則通りです。